

いわ み ぎん ざん 石見銀山

遺跡総合調査概報(3)

平成15年(2003)3月

温泉津町教育委員会

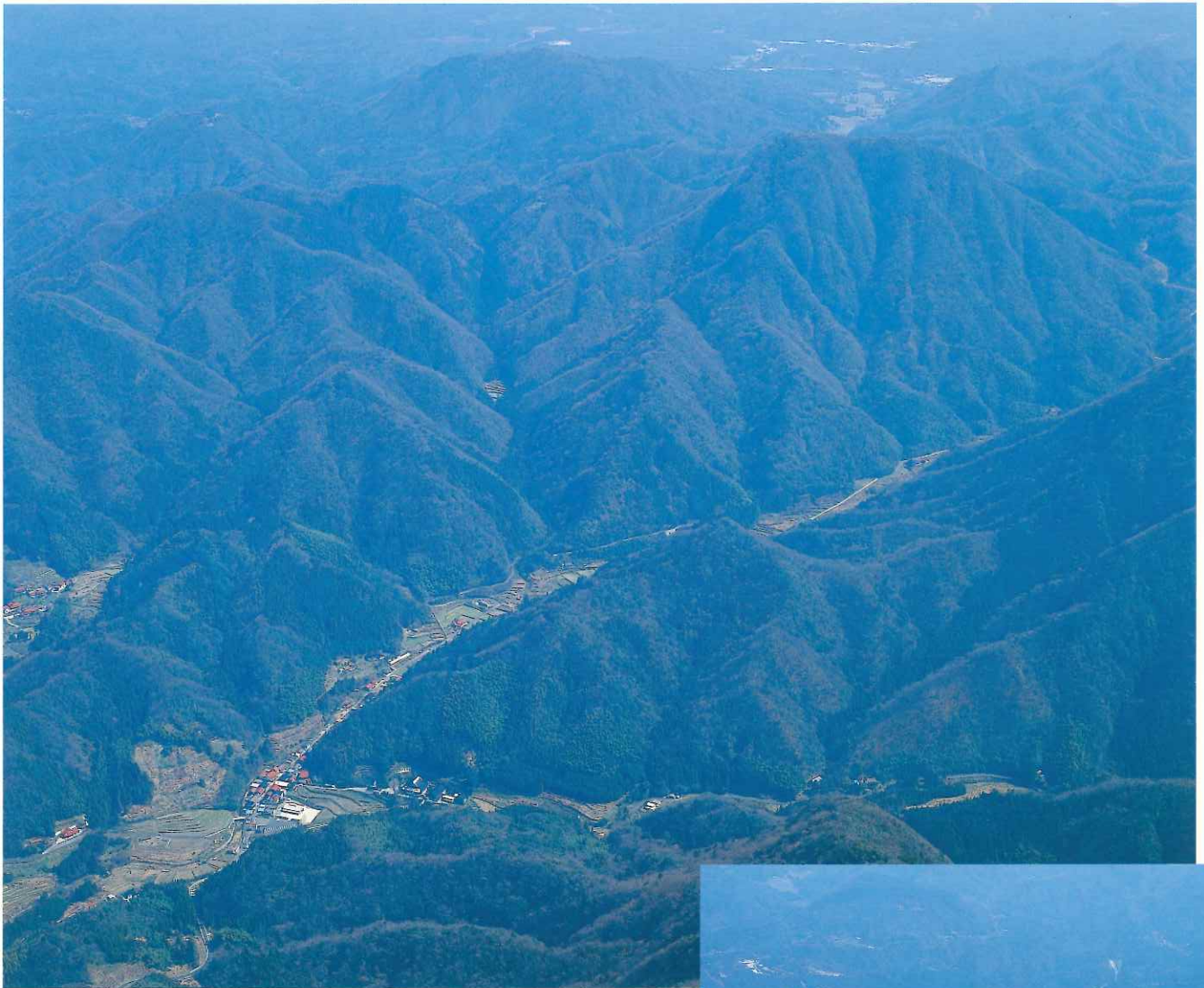
仁摩町教育委員会

大田市教育委員会

島根県教育委員会

銀山と中世港をつなぐ～石見銀山街道～

昨年史跡が拡大された石見銀山遺跡は、大田、温泉津、仁摩の1市2町にまたがり総面積は約320㍍にも及びます。その中には銀の積み出しと物資の輸送に利用された港湾跡、鞆ヶ浦（仁摩町）と沖泊（温泉津町）の二つの港を含みます。石見銀山街道は、柵内と呼ぶ銀山山内と、主に中世末から近世初頭にかけて利用されたこの二つの港をつなぐものとして、今年度から調査が行われ、ルートの確定とともに、さらに国史跡の追加指定を目指しています。



銀山～沖泊・温泉津ルート

写真はルートの中ほど、温泉津町西田地区から銀山方向を撮したものの。左下が西田で、この集落を通過して銀山方面に向かいます。五老橋付近からは狭い谷間に入り、降路坂という険しい坂道が続きます。その右手の山が矢滝城、左手に矢筈城があり、銀山攻防戦にまつわる山城の跡です。後方中央の山が銀の採掘が行われた仙ノ山、その左手が山吹城と呼ぶ要害山です。右下の写真は日本海に面した沖泊と温泉津の港を撮したもので、ここから銀山までは約10kmの距離があります（トレース図参照）。



街道調査

こうろ

戦国時代に銀鉱石や銀を送り出したという温泉津・沖泊ルート（降路坂から西田を経て温泉津町温泉津・沖泊へ通じる）、鞆ヶ浦ルート（銀山畑口から仁摩町友へ通じる）の確定をめざして現地踏査、文献調査、石造物調査、建造物調査等を実施しました。

現地踏査では、森林に入って実際に使われていた古道の所在を確認したり、銀の輸送に関する伝承の聞き取り調査を行いました。文献調査では、古道のルートの手がかりとなる古絵図や切り図・古い記録を、県内外で捜しました。石造物調査では、人々の往来や信仰の手がかりとなるような宝篋印塔や五輪塔・地藏尊などの所在を、想定ルートに沿って確認して廻りました。建造物調査では、ルートの近隣に立地する旧家・寺院・神社などの古建築や、銀山と直接関係した鉱夫住宅などを実測調査しました。これらを通じて、街道のルートを明らかにし、併せてその近隣に残された歴史的景観の調査を進めています。



街道の手がかりをつかむうえで明治前期の切り図が役に立ちます。
(広島大学中央図書館)



鞆ヶ浦ルートの手がかりを与えてくれる元和年間石見国絵図(浜田市教育委員会所蔵)

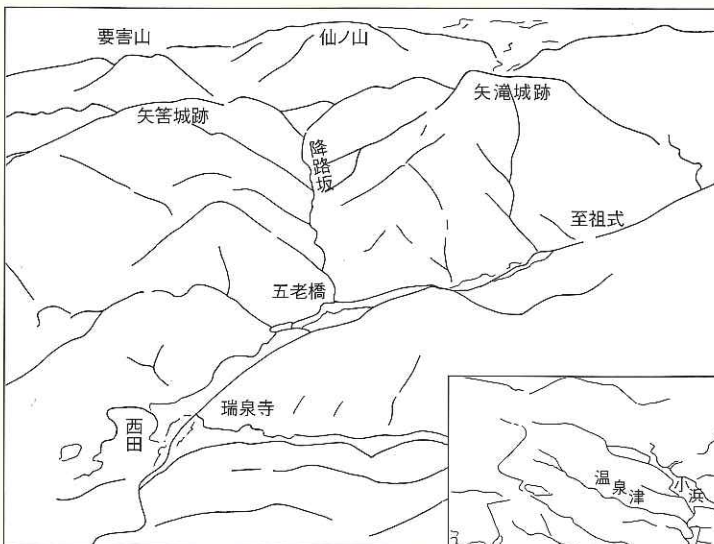


現地では地形図や切り図を広げてルートを検討します。



銀山柵之内の畑口から仁摩町馬路口屋までの道筋が描かれています。

仙ノ山から佐毘売山神社に降りる途中、柑子谷から冠方面を見る。



(表紙写真トレース図)



街道沿いの建造物の調査も行います。
仁摩・柑子谷鉱夫住宅



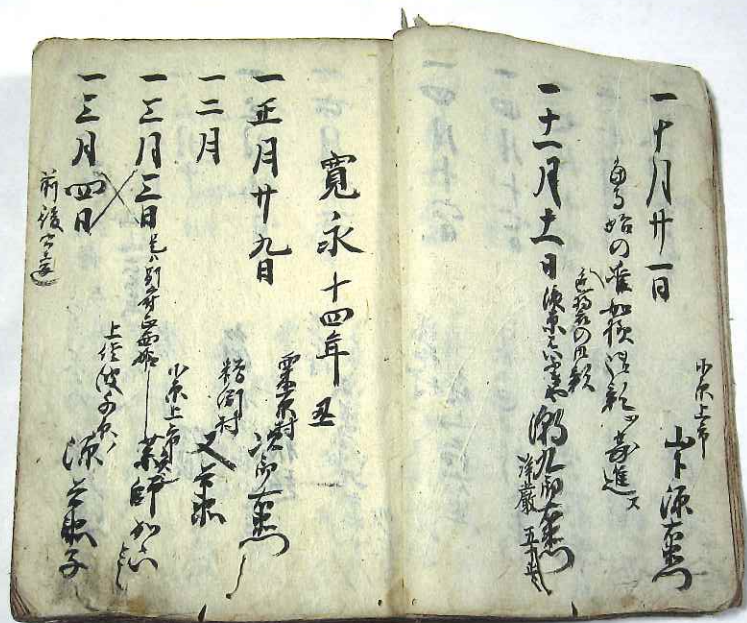
温泉津・西田地区の瑞泉寺山門

文献調査

文献調査では、石見銀山そのものについての調査に加えて、日本国内の他鉱山との技術的人的交流、日本国内の石見銀の流通、世界貿易における日本銀・石見銀の流通について明らかにすることを目的としています。史料調査及び収集を積極的に行い、日本国内では石見銀山に係る史料調査を体系的に実施し、目録作成・写真撮影を行っています。

海外でも、韓国・中国・インドネシア・ポルトガル・スペイン・イタリア・オランダにおいて調査を実施し、関連史料の収集・翻訳に努めてきたところです。

今年度は、島根県内の在地文書の調査に力を入れました。銀山の周辺地域でも範囲を広げて、調査を進めています。



「はいふきや」が確認された過去帳
(浄土寺文書)

島根県邑智郡邑智町の浄土寺は、在地領主佐和氏の請いにより徳治元年に開山されたと伝えられています。山陰における浄土真宗発祥の寺院として、江戸中期においては直末寺院52ヶ寺、その配下を含めると290余寺を支配する銀山周辺地域では最有力寺院の1つです。

浄土寺の過去帳に、「浜原はいふきや 潮九郎右衛門」という人物が寛永13年11月に亡くなっているという記録があります。他の関連史料から、この人物は銀山から浜原に移住し、灰吹や両替を職業としていたことがわかりました。

山元の大森や貿易港の温泉津に灰吹屋があったことは知られていましたが、これらの史料から、銀山から離れた内陸部の浜原にも江戸初期に灰吹屋が置かれたことが明らかになりました。

わにくち

鯨口 (中村久左衛門家所蔵)

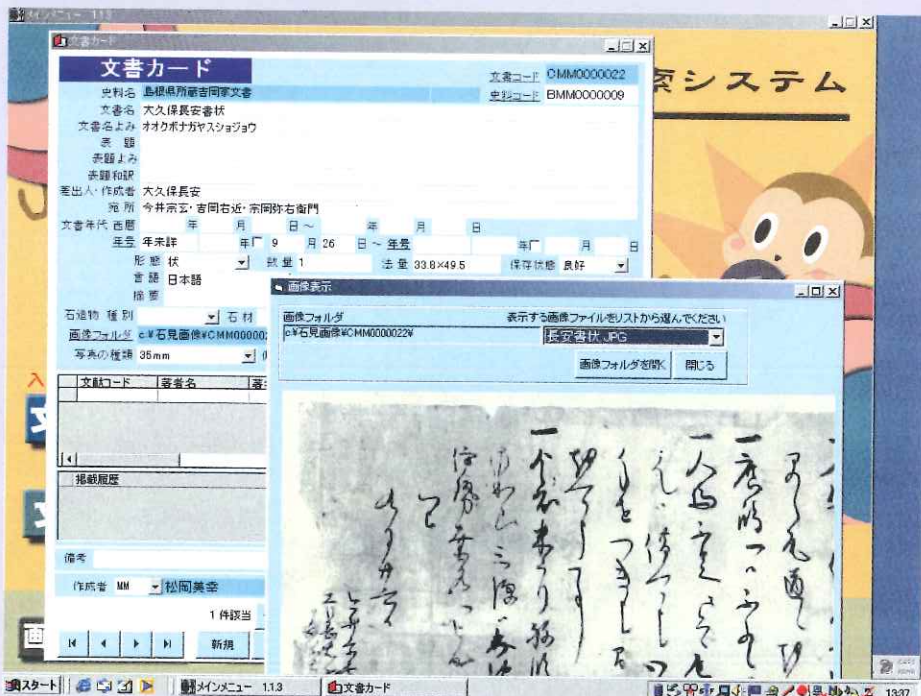
文献調査では、時として古文書以外の珍しい資料に出会うことがあります。この鯨口(法楽器の一種)は邑智郡桜江町の中村久左衛門家に所蔵されるもので、近年蔵の整理中に発見されたものです。

銘文に「奉施入鯨口 大旦那岡部久衛門将・伊藤宗五郎/石州清水寺常住天正六年戊寅十月十八日」とあることから、本来この鯨口は天正6年(1578)10月に岡部、伊藤の両名から銀山の清水寺に寄進されたもの、であることがわかります。清水寺所蔵の鯨口としては別に、永禄6年(1563)8月に伯耆国小鴨の長谷山中金屋大工の九郎左衛門が製作したものがああります。これは別の目的で作られたものを、銀山の藤井二郎左衛門が慶長2年8月に清水寺に寄進したものです。



石見銀山歴史資料検索システム

文献調査では、収集調査した史料を活用するために、データベースを作成しました。キーワードで、史料や関連書籍や年表の検索をすることができます。現在、データの整備を行っているところです。



発掘調査

平成14年度発掘調査は、柵内では前年度に引き続き竹田地区・於紅ヶ谷地区・出土谷地区・本谷地区の4地区で発掘調査を、柑子谷地区では遺跡分布調査をおこないました。柵の外では、重文旧熊谷家住宅や県指定史跡旧阿部家住宅の保存修理工事に併せて敷地内で遺構確認調査、県道仁摩瑞穂線（門谷工区）改良工事に伴い宮の前地区で発掘調査を実施しました。



トレンチ調査状況

●竹田地区

I区・IV区・V区で調査を行い、IV区に設定したトレンチでは鉄鍋を埋めた製錬炉の跡が検出されました。またV区（写真）の尾根上のトレンチでは、削平や造成によって平坦面が構築された様子が確認されましたが、ここでは竹田地区の他調査区のような建物基礎などは確認されませんでした。なお造成土中から平安時代の土器が出土しています。



49番間歩前の調査状況

●於紅ヶ谷地区

49番間歩前に設定したトレンチでは、岩盤に彫り込まれた窪みや、鋳脈の採掘時の工具の痕跡が鮮明にのこる壁面が確認されました。

建物跡で下層確認トレンチによって、平坦に岩盤を加工した面で杭列が検出され、造成の変遷がうかがえます。また、平坦地北側の石垣周辺では2段積みの石垣が明らかになりました。



●出土谷地区

調査地区の西側に隣接する道跡と水路跡、その西に位置する坑口のある平坦地の調査を実施。二つの平坦面とその間に位置する道と水路がほぼ同時に構築されている状況が確認されました。道と水路は敷設位置が異なるなど数度にわたって構築されたものです。

平坦地の周囲にある石垣と岩盤について三次元実測をおこないました。

遺構検出状況

●本谷地区

本谷の中腹にある大久保間歩と金生坑と周辺で遺跡の内容確認のために、トレンチを設定し調査をおこないました。

調査により現在の道は明治時代以降に設置されたものであること、また道沿いの平坦地には建物が存在したことが明らかになりました。継続して調査を実施する予定です。

本谷の現況



●柑子谷地区分布調査

今年度は柑子谷地区のうち、主に谷奥にあたる南側の範囲を中心に分布調査をおこないました。

調査の結果、新たに平坦地や石垣などのほか、江戸時代の墓石を中心とした石造物が数多く発見されました。

また、500分の1の遺跡地形図を継続して作成しました。



●旧熊谷家住宅遺構確認調査

建造物の保存修理事業に併せて、建造物の遺構確認調査をおこないました。建物内の土間や敷地内の下層で、古い土間や基礎石が検出され、石積みの地下蔵の全容が明らかになりました。この成果は建物修理や復原の資料となりました。



●宮の前地区

4区では2周×3周の規模の礎石建ちの建物跡が検出されました。この建物内部には銀製錬の炉跡が配置されていることから、銀製錬工房と考えられます。建物の壁土や木舞、屋根材などが出土しており、復原が可能です。

また陶磁器、道具などの金属製品、碗・櫛などの木製品、銭貨、石臼などが出土しています。

遺構の剥ぎ取り事業（保存科学）と土壌分析（科学分析）

竹田地区I区の方形炉と宮の前地区4区の建物跡は、これまでの発掘調査の検出遺構の中でも保存状態が良いので、そのまま遺構の「剥ぎ取り」をおこないました。炉跡や内部の土、土間の状況などをそのまま面的に剥ぎ取ることによって、調査後も遺構を見ることができ、今後の調査研究や整備活用に活かすことができます。また石見銀山が存在した時期の環境を考えるために、竹田地区では土壌分析（花粉・プラントオパール）をおこないました。銀山として機能していたころの植生などの環境を考える基礎データとなります。



竹田地区 SX14



宮の前地区 建物跡

科学調査

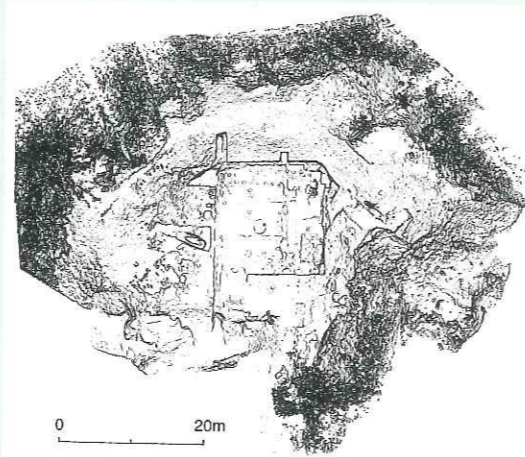
発掘調査資料などの分析

発掘調査が進むところでは、遺構の検出状況などに合わせて、科学調査に供する資料のサンプリングが行われます。今年度は竹田地区で見つかった方形炉跡の断ち割り調査が行われ、その炉跡を構成する土や内部に溜まった土質を採取しました。現場から持ち帰ると定量・定性分析などを行い、どんな元素がどれだけ含まれているかなどを分析して、炉の性格などに科学的に迫りつつあります。(竹田地区の方形炉跡の調査)



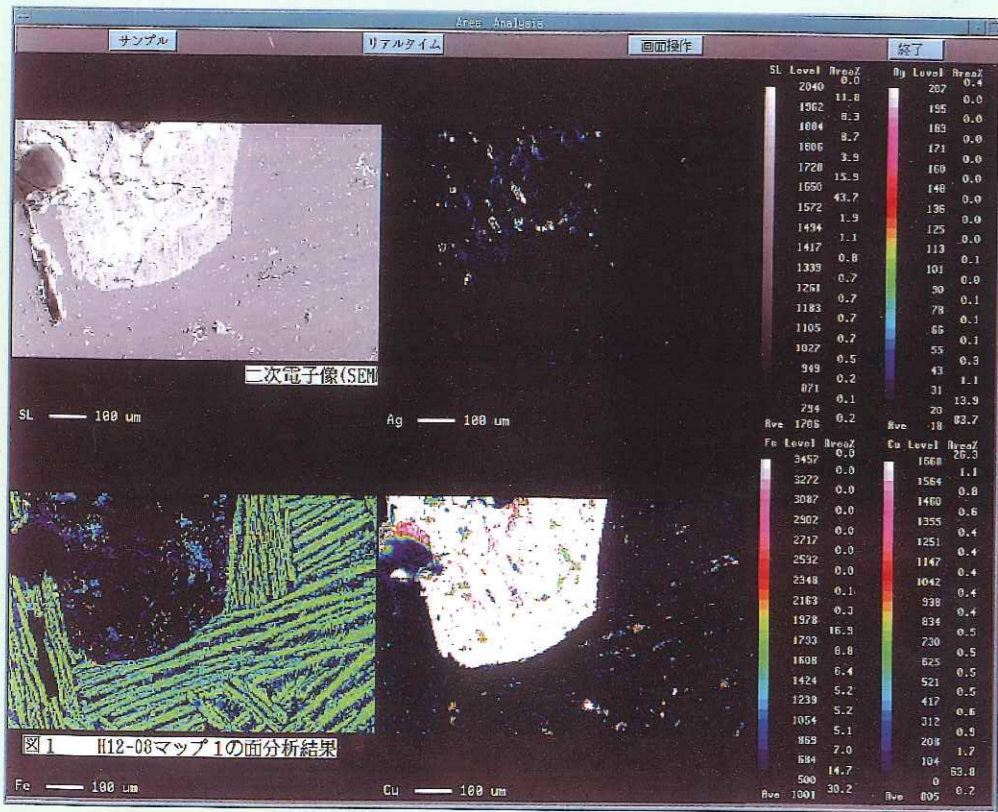
遺構を記録し保存方法を探る

科学調査では、資料の科学的な分析とともに、遺構・遺物の記録や保存方法の検討もしています。
① 於紅ヶ谷地区のレーザー光線による三次元計測は、今年で2年目を迎えました。岩盤に残るタガネの掘削痕の記録や、出来るだけ広く周辺の地形を計測して、建物跡と石垣や周歩・露頭堀の跡がどのような位置関係にあるのかなど調べました(右の作業写真と素図)。
② 坑道跡を発掘調査すると、岩盤を掘り進んでいった鑿の痕が残り、当時の生々しい労働の跡を見ることが出来ます。しかし、そのまま風雨にさらしてしまうと、直ぐに痛んでしまうことから、これをどのように保存し、そして将来的にどう公開していくのが、検討しておく必要があります。そこで、試験的に壁面に薬剤を塗布し、塗らないところと対比させながら、どのように変化するかを観察することを始めました。



ミクロン(1/1,000)の世界をのぞく

鉱石から銀を製錬していく際に捨てられたカラミ(鉱滓)の内部を、電子顕微鏡で覗くといろいろなことがわかってきます。カラミの微小な部分をX線によって分析すると、さまざまな元素がどんな状態で存在しているかを詳しく把握することができます。この資料では、銅(Cu)の中に銀(Ag)が部分的に濃集し、周辺には鉄(Fe)を含む針状の鉱物(カンラン石)が生成している様子がうかがえ、もともとの鉱石に銅が豊富に含まれていたことが推定できます。このような調査を、根気強く進めていくことによって石見銀山遺跡における近世の銀製錬技術の解明が可能になってくるのです。



調査のステップアップを目指して

科学調査ではこれまで、発掘調査などで得られた資料を分析し、石見銀山遺跡における採掘から製錬に至る技術を解明しようと調査を進めてきました。その結果、昨年度はここ数年間で得られた成果をもとに、選鉱から製錬・精錬の各工程を明示したフローチャートを提示することができました。これまで古文書や絵巻物などを中心にして考えられてきたものとは異なり、鉱床・鉱石の性質の違いや各工程のなかで作り出されたズリ、ゆりかす、カラミといった廃棄遺物に着目し、両者の情報を結びつけた科学的な根拠にもとづくものでした。引き続き廃棄遺物の分析を通して採鉱品位や、時代ごと・地域ごとの製錬技術の違いや変遷を明らかにしたり、カラミや炉に使用された土の分析による炉の解明など、これから解明しなければならない問題が数多く残されています。当時の技術解明のためには科学調査の継続と客観的データの蓄積が不可欠です。

石造物調査

石造物調査は毎年、分布調査、悉皆調査、関連調査という3本の柱で調査を組み立てています。分布調査は仙ノ山の西麓にある本谷地区で行い、浄国寺跡などで約110点の石造物が見つかりました。これまでに行われた柵内の分布調査の結果を合計すると、5,800点ほどの石造物が確認されたこととなります。

悉皆調査は、今年度真言宗寺院に付属する墓地を対象としました。昆布山谷にある長楽寺跡は明治前期まで存続し、境内地がよく残っています。確認した石造物の総数は213点で、19世紀半ばまでの石塔があり、最も古いものには文禄3(1594)の銘がありました。ここでは石造物がおよそ6カ所に分かれて分布しており、真言宗、浄土宗、浄土真宗、曹洞宗、日蓮宗の各宗派に属すると思われる墓標が存在することから、惣墓(共同墓地)として形成された可能性があります。関連調査では、昨年度行った奉行・代官墓所に続いて、銀山支配の上で重要な役割を果たした地役人関係の墓所の調査を始めました。また、勝源寺とその境内の東照宮に伝わる位牌の調査も行って記録を作成しました。

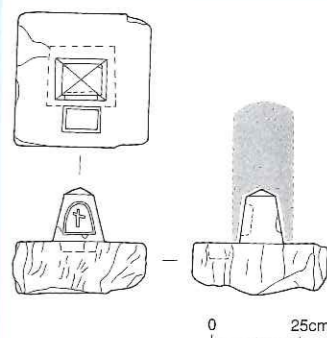


長楽寺跡の調査風景



異形の墓石 クリンタン墓石?

35cm四方で高さ15cmの台座に、縦11.5cm、横14.5cm、高さ15cmの四角錐状の突起が作り出されています。正面に縦5cm、横4cmの十字架状の刻みがあり、それは何か別のもので覆い被されていたようです。銀山では墓石の多くが温泉津産の福光石で出来ていますが、これは地元でとれる山石を加工したものと思われます。



長楽寺跡の調査

歴代住持墓地近くに散在する石塔群で、旧境内地横の高所にあります。無縫塔と呼ぶ円筒形の石塔や、組合せ宝篋印塔などの古い年代の墓石の破片が混在しています。左写真は戦国末期、文禄3年(1594)の紀年銘が刻まれた組合せ宝篋印塔の基礎部分。



地役人の墓地調査

浄土真宗・西性寺墓地の一角にある、銀山地役人を務めていた宗岡・河嶋両家の墓地を調査しました。世代ごとに区画・整理されて現代まで続いている様相が把握できました。



勝源寺・東照宮の位牌調査

浄土宗・勝源寺には2代目銀山奉行竹村丹後守をはじめとする、6名の奉行・代官の墓所があります。なかには半壊したものや銘文の読みづらくなったものがあり、関連で同寺に伝わる位牌を調査しました。同じ境内にあって徳川幕府の歴代将軍の位牌を納める東照宮とも合わせ、計29点の位牌を記録しました。

町並み保存地区の調査

重文旧熊谷家住宅の保存修理

主屋と土蔵5棟などの保存修理工事では、建物に仮設屋根をかけて解体しながら建物の変遷を調べました。さらに発掘調査、古写真や絵図等の資料調査、住んでいた方の聞き取り等も並行してすすめ、寛政12年(1800)の町並みの大火後に再建された後も主屋や土蔵の増改築が順次おこなわれたことが明らかになり、埋め戻されていた地下蔵などの遺構も確認しました。解体修理に伴う調査でわかったことを根拠にして、屋敷が最も整った江戸末期から明治初年の姿に復原することになりました。



家財調査・文化財収蔵庫では家財約3300点を清掃し、1点ずつ記録カードを作成しました。これから分類と整理をおこないます。



▲保存修理現場・仮設屋根で覆われた主屋です。約8ヶ月かけて丁寧に解体しました。解体に伴って台所や地下蔵などの遺構確認調査もおこないました。

◀現地見学会・修理現場の見学会を開催し、一般の方々に解体途中の様子や検出された遺構を公開しました。



手降ろした瓦は選別し、一枚ずつ清掃して再び屋根に葺きます。このように保存修理ではなるべく元の材料を再利用します。

住宅・社寺の保存修理～稲荷神社(城上神社境内)

今年度、地区内では民家住宅、社寺や土塀あわせて6件10棟の保存修理を行いました。

稲荷社は、城上神社の拝殿に向かって右手にあります。本殿のケラバが一部崩落していたことや瓦の損壊、葺き乱れがあったため、屋根替えを行いました。



修理後の稲荷神社

発見された棟板と城上神社拝殿内の額縁付き板

棟板には、54代代官森八左衛門(在職1846~53)の寄進により嘉永5年の再建を示す墨書がありました。額縁付き板は、本文の解読はできませんでしたが、57代代官加藤餘十郎(1858~63)の名が確認されました。